

## 環境大臣賞（優秀賞）

### 未来に繋ぐ優しい水音

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 大城 冨和

川の流れのせせらぎ、波の音、雨音等、これらは全て水が奏でる音だ。人の生活の中にはいつも水音、つまり水が寄り添っている。

私が以前住んでいた長野県松本市には、「まつもと城下町湧水群」と呼ばれる井戸や湧水が沢山あった。したがって、海はないが水はいつも身近な所に存在した。これらは江戸時代には、人々の日常生活や防火用水として利用されていたそうだ。市内には水音が常に響いており、私はその音を聴きながら、城下町を家族でのんびり散歩することが好きだった。「水巡りマップ」を片手に古い町並みを探検し、水場で湧水を飲むと、まるでタイムスリップしたような気分になったものだ。また、江戸時代に町の境界線としての役割も果たしていた水路は、時代を経た今も、潤いを与えてくれている。このように水を上手く利用し、町も文化も発展し、今がある。そのことを古い町並みと心地よい水音が私に教えてくれた。

その一方で忘れてはならないことは、水が与えるものは恩恵だけではないということだ。近年、日本では「観測史上最大級」、「未曾有」という言葉のついた水害が多く発生している。大規模な被害をもたらす台風に着眼してみると、温暖化の影響で関東や中部等を通過する東寄りの軌道が増え、その勢力も年々強くなってきているようだ。昨年の台風十九号は、複数の都市に、甚大な被害をもたらした。そこには長野県も含まれており、私の祖父母の家も浸水の被害を受けてしまった。「七十年近くここに住んでいてこんなことは初めて」、「長野県にこんな大きな台風が上陸するなんて。」と祖父母は口々に語った。テレビの映像や送られてくる写真では、私のよく知っている場所が水没し、幼い頃に祖父母と遊んでいた公園も災害ゴミで見る影も無くなっていた。そして、避難場所に指定されていた場所さえも浸水してしまい、避難していた人々が再避難する状況も起こったそうだ。私は大きなショックを受けた。

小学校四年生の時に、長野県から宮崎県に引越して来た私は、両県の水害に対する対策に違いがあると感じた。海がなく、台風もなかなか上陸することのない長野県では、学校の避難訓練で屋上避難の練習をしたことがなかった。また、雪への備えはしたことがあっても、台風への備えはしたことがなかった。昨年の台風十九号が未曾有の災害であったのは確かだ。しかし、長野県で被害がより大きくなってしまった原因の一つに、地域による水害への対策や意識の違いもあったように思う。私が宮崎県で初めて台風を経験した時、風雨のあまりの威力に驚いた。宮崎県での生活は、私の水害に対する意識を大きく変えてくれた。厳しい冬や大雪に対して適切に対応できる長野の人々。津波に備え、台風に対しても適切に対応できる宮崎の人々。両県に住んでみて、同じ日本でも、その土地その土地の自然との付き合い方が、知恵として根付いていることに気付かされた。

水資源が豊かな水の国日本。しかしそれは同時に、水害と常に隣り合わせであるということだ。これまで人々は、治水事業を行いながら水と共に生きてきた。地球温暖化による気候変動により、私達はおそらくこれから先何度も未曾有の水害を経験するのだろう。水なしに人の生活は成り立たない。私達は水に翻弄されつつも、水に生かされている。だからこそ私達も、水害に立ち向かいそして学び、昔の人々が繋いでくれたバトンを新しい形で次に繋げていくことが大切だと強く思う。心地よい水音が響く、美しいこの国を後世に継承していく為に。